

はじめに

なぜ、あるとき私は生かされたのだろうか……。

これから始まるストーリーは、私が40年ほど前にあの世のドアをうっかりノックしてしまった実話をもとにしたものである。とはいえ、あの世の話ではない。あの世には入れてもらえなかったのだ。なぜノックすることになったのか、そのうえなぜ入場拒否されたのか、それ以来ずっと考えつづける人生が始まった。アメリカで最も美しい秋を持つといわれるニューヨーク州地方で、当時、全米で最も軽犯罪が多いといわれていたある都市での体験をもとにした物語である。

簡単に言えば、現地の若者の乗った車によるひき逃げ事故にあって一度は心肺停止したが、奇跡的にほぼ全快した話だ。

当時仲良くしていた在日韓国人スーが住んでいたアパートの前だった。入り口の開け方を教えてもらうためだけに、私は当時の大親友だったケンジの車を後部左側のドアから降り、道路を渡った。そのとき、スーの悲鳴が炸裂した。

次の瞬間、私は宙に浮いていた。気持ち良〜くフワフワと漂いながら、暗闇の中血だらけで転がっている自分を見ていた。

ええええ!

あそこで倒れているのは、私?

死んでるの? 私……。

車道側のドアから外に出た私は、後一步で道路を渡り終えるところだった。

そのとき、右脚大腿部に衝撃を受け空中に跳ね飛ばされた。そして自動車5台分ほど(約25m)先の歩道わきに前歯で着地したのだった。臨床検査技師だったスーはすぐに駆け寄り、脈を取った。脈はなかった。呼吸を確認した。それもなかった。ドラマチックにも雨が降っていた。

もちろん、私にそのような記憶は1ミリもない。全部聞いた話だ。事故の数時間前から事故後1カ月ほどの記憶はいまだに戻ってこない。それでも、毎日のように病院に来てくれた友人たちから聞いた話や、母が書いた日記と手紙、さらに現地の新聞記事や警察の書類などを頼りに、私にとって人生最大であろうこの経験を1つの物語にまとめたいとずっと考えてきた。ずっとずっと考えていたら、40年も経ってしまった。あの世の扉が正式に私に向かって開かれる前に、この世で形にしたい。その気持ち

が高まったところに、GalaxyBooksさんからお誘いを受けた。引き寄せた。

だが、単に交通事故の経験を語りたいわけではない。脳手術の後、不思議ともいえる体験や、今なら笑ってしまうようなことをたくさんヤラカシた記録が残っている。脳手術といっても、頭蓋骨の2カ所に小さな穴を開け、脳の出血を洗浄する（だけの）手術と聞いた。だが、その影響で起きることは、本当に予想のできないあれやこれやなのだ。それで、脳に触れたら何が起きるか、人間とはいかに摩訶不思議な生き物であるかを書いておきたいと思ったのが第一の理由だ。

また、入院とか手術という言葉には、若干「悲劇！」の響きがあるが、私の記憶では、（痛いことはそりゃああったが）体験全体としては楽しさを含む貴重な時期であったし、命の学びはもちろん巨大だった。このようなことを欲張って、可能な限り語りたいと思っている。